ハンドボール競技における個人技術の一考察：突破時のドリブルに着目して

A Study of Personal Technology in Handball Competition: Focus on Dribbling at Breakthrough

キーワード：ヨーロッパ選手権、攻撃方法、攻撃局面、ドリブル
Keywords: European Championship, Attack method, Attack phase, dribble

八尾　泰寛
YAO Yasuhiro

1. 緒言

ハンドボール競技は、規定の競技時間内で相手のチームに対し、より多くの得点をあげたチームが勝者となる[1)]。

得点をあげるために、攻撃は、防御ラインを破る、数的優位を作る、空間的優位を作ることがあげられ[2) 3)]、そのためプレーヤーは、肉体的、体力的領域、技術的、運動的領域、精神的、道徳的領域においても多面的な基礎能力を身につけ、それらを独自な競技能力として十分に発揮することを目指し、努力する必要がある[4)]。スポーツ的達成能力における、たびたび繰り返される急速なスタートとストップには、全力疾走スピードと行為スピードばかりでなく、協調能力も要求され、それらを競技能力として十分に発揮することを目指す。

技術は、形と内容において特殊な習熟された動き全体を意味し、試合において最大の効果を引き出す目的のため神経活動などに基づいて行われるボール処置、それに伴うプレーヤーの移動運動をさすと述べられ[2)]、ハンドボールのパスやドリブルという言葉を用いた際に、攻撃側プレーヤーのある特定した身体運動であることと理解できる。

それは、どのようにパス、ドリブル動作が行われるのか。走りながらパスをする、ドリブルする。ジャンプしながらパスをする。ジャンプしながらドリブルをする。このような技術は、動的ステレオタイプを基礎に単純技術として実施される。そして、試合過程の中で行われる複合技術は、常に変化する試合状況、戦術状況によって、1つの技術実施中断から他の技術への継続や、技術の多様な組み合わせなどの動きのリズム、強度、幅の変化が必要となる[5)]。そして、ドリブル技術は、シュートに結びつける目的で行われ、ボールを素早く敵陣へ運ぶことやルール上、許される歩数を最大限に利用すること。攻撃局面においては、フェイント動作、タイミングを合わせシュートへ至るために空間を移動することなど、突破を試みる際の複合技術が重要と考える。

そこで、本研究では、2018‘女子EURO選手権大会のSemifinal 2試合とFinal 1試合のビデオから、世界トップレベルの試合全体像と個人技術のドリブルに着目し、攻撃の1対1、2対2の局面から、突破を試みる際のドリブルの試行方法、ボール保持足、前後のステップワークに関するトレーニングの資料を得ることを目的とした。

2. 方法

対象試合は、2018’女子EURO選手権大会Semifinal 2試合とFinal 1試合を分析の対象とした。

分析項目は、分析にあたり試合全体像を明らかにするために、攻撃評価をスコアー用紙に記入した。1）攻撃回数、2）得点数、3）シュート数、4）ミス数をカウントした。

ヨーロッパ選手の個人技術を明らかにするために、攻撃方法ごと突破時におけるボール保持者のポジション、1対1、2対2における突破を試みる動作からのドリブル状況、フェインからのドリブル、パス、ドリブル後のボール保持足を項目ごとに集計用紙に記入し、個人技術のドリブルの有効性を明確にした。

攻撃のポジショニングは以下の通りである。

LW･･･左サイド／RW･･･右サイド。
コートサイドに位置し、防御からの速攻では素早いスタートを要求される。
PV･･･ポスト
防御間に位置し、ゴールを背に相手防御隊形の中で味方の攻撃をサポート。また、味方からのアシストパスを保持しポストシュートを放つ。
LB･･･左45／RB･･･右45／CB･･･センター
防御を前におき、防御の上から、防御間からのロング･ミドルシュート、フェイントで防御間を突破する。攻撃の中心。

3. 結果

1試合における攻撃の全体評価を表1に示した。全体の攻撃回数は48.7±3.7回で、速攻が7.7±2.1回、遅攻が41.0±3.9回で、遅攻が約8割だった。シュート数は、全体が27.9±7.1本で、速攻が3.9±1.2本、遅攻が24.0±1.7本であった。シュート到達率は、全体が57.3％で、速攻が50.7％、遅攻が58.5％であった。得点数は、全体が23.8±4.6本で、速攻が3.5±1.1本、遅攻が20.3±2.3本であった。攻撃成功率は、全体が48.9％で、速攻が45.5％、遅攻が49.5％であった。ミス数は、全体が20.8±4.5本で、速攻が3.8±1.3本、遅攻が17.0±4.5本であった。ミス率は、全体が42.7％で、速攻が49.3％、遅攻が41.5％であった。

表1　1試合における攻撃の全体評価

	全体	攻撃方法	
		速攻	遅攻
攻撃回数（回）	48.7 ±3.7	7.7 ±2.1	41.0 ±3.9
シュート数（本）	27.9 ±7.1	3.9 ±1.2	24.0 ±1.7
シュート到達率（％）	57.3	50.7	58.5
得点数（点）	23.8 ±4.6	3.5 ±1.1	20.3 ±2.3
攻撃成功率（％）	48.9	45.5	49.5
ミス数（回）	20.8 ±4.5	3.8 ±1.3	17.0 ±4.5
ミス率（％）	42.7	49.3	41.5

mean±SD

攻撃時の突破を試みるポジション割合を図1に示した。全体のLWは6.2％、LBは24.3％、CBは37.0％、RBは20.9％、RW6.8％、PVは4.8％であった。LB・CB・RB（以下、BP）が約8割とボール保持し、攻撃展開を行っていた。

攻撃方法別速攻では、LWは8.7％、LBは15.2％、CBは28.3％、RBは19.6％、RW19.6％、PVは8.7％であった。速攻局面は素早いスタートから攻撃をする先行プレーヤーが約4割、攻撃の中心であるBPが約6割であった。

攻撃方法別遅攻では、LWは5.7％、LBは26.0％、CBは18.6％、RBは21.3％、RW4.5％、PVは4.1％であった。

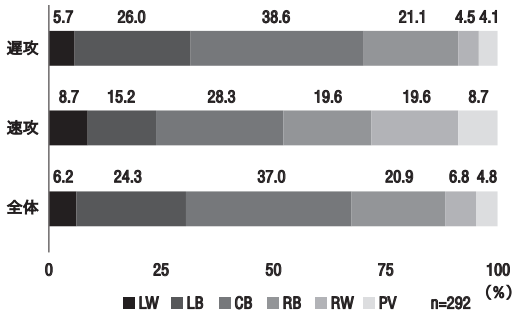

図1　攻撃時の突破を試みるポジションの割合（％）

攻撃方法別の1対1、2対2の割合を図2に示した。全体での1対1の攻撃は43.5％、2対2の攻撃は54.8％であった。速攻時の1対1の攻撃は56.5％、2対2の攻撃は41.3％であった。遅攻時の1対1の攻

撃は41.1％、2対2の攻撃は57.3％であった。

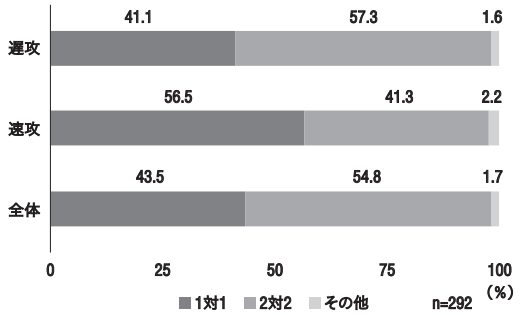

図2　攻撃方法別の1対1、2対2の割合（%）

攻撃方法別1対1、2対2の成功率を図3示した。全体では、1対1が46.5％、2対2が44.4％であった。速攻局面での1対1が50.0％、2対2が31.6％、遅攻局面での1対1が44.6％、2対2が46.1％であった。

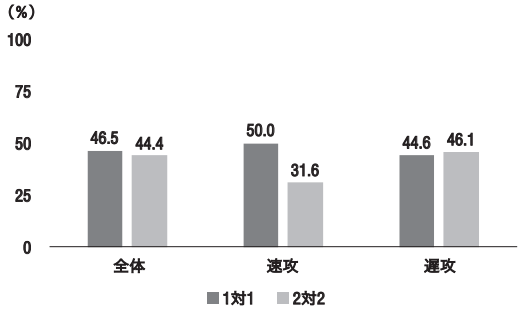

図3　攻撃方法別局面の成功率（%）

攻撃局面ごとのドリブル・パスの割合を図4に示した。1対1のドリブルは41.7％、フェイント後のドリブルは8.7％、パスのみは49.6％であった。2対2のドリブルは23.8％、フェイント後のドリブルは28.7％、パスのみは47.5％であった。

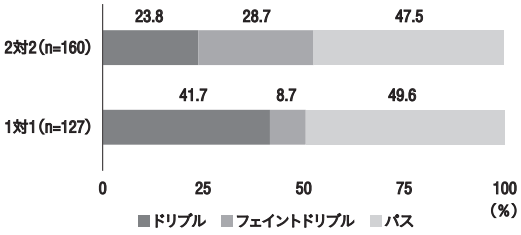

図4　攻撃局面ごとドリブル・パス割合（%）

攻撃方法別ドリブル・パスの割合を図5に示した。全体では、ドリブルが31.8％、フェイント動作からのドリブルが19.5％、パスが48.6％であった。速攻時のドリブルが26.1％、フェイントからのドリブル58.7％、その他が15.2％であった。遅攻時のドリブルが32.9％、フェイントからのドリブルが20.4％、パスが46.7％であった。

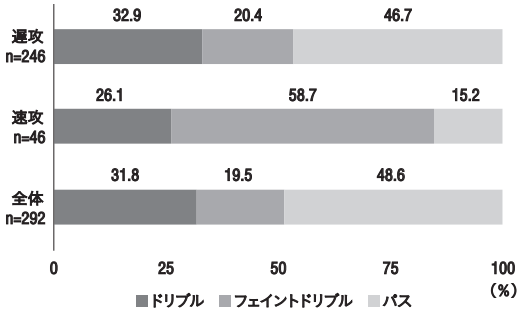

図5　攻撃方法別ドリブル・パス割合（%）

攻撃方法別ドリブルにおける突破時の成功率を図6に示した。全体では、ドリブルが31.9％、フェイント動作からのドリブルが53.6％であった。速攻時のドリブル66.7％、フェイントからのドリブル42.9％であった。遅攻時のドリブル49.4％、フェイントからのドリブルが56.0％であった。

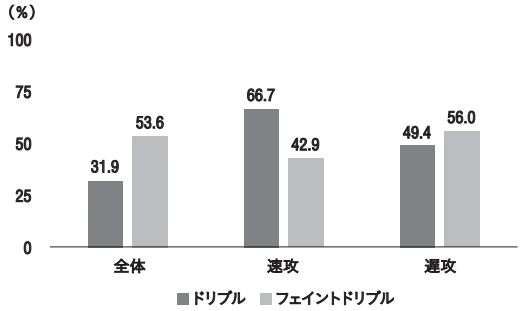

図6　攻撃方法別ドリブルにおける突破時の成功率（%）

攻撃局面ごとの突破時におけるドリブル後のボール保持足を図7に示した。1対1の局面時のドリブル後のボール保持足は、右足が54.5％、左足が45.5％であった。1対1時の局面時のフェイントドリブル後のボール保持足は、右足が40.0％、左足が

60.0％であった。2対2の局面時のドリブル後のボール保持足は、右足が47.4％、左足が52.6％であった。2対2時の局面時のフェイントドリブル後のボール保持足は、右足が43.5％、左足が56.5％であった。

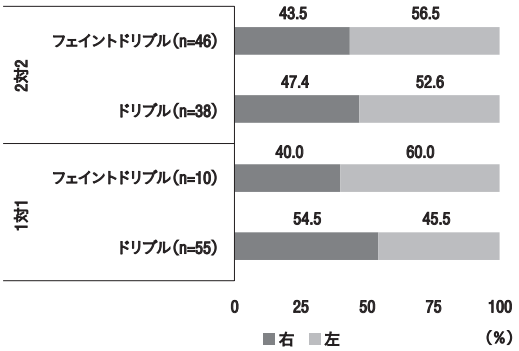

図7　攻撃局面ごとの突破時におけるドリブル後のボール保持足（%）

4. 考察

1試合における攻撃の全体評価は、全体の攻撃回数は48.7±3.7回で、1回の攻撃は、ゆさぶりから突破まで約35秒前後かけて攻撃され、10回の攻撃で速攻が約1～2回、遅攻が8～9回であった。シュート到達率は、攻撃回数の約6割で、ミス率が約4割、攻撃成功率は約5割であった。これは、5回に3回シュートに到達し、1回から2回の得点となる。杉森らは、1試合のミスプレー率の平均は26.7％で、勝ちチームのミスプレー率は22.8％、負けチームが32.6％と報告していることで[1]、試合に勝利するためには、1試合のミスは3割以内に抑える必要がある。リオデジャネイロオリンピックでの韓国、ノルウェーのシュート到達率は約8割で、ミス率は約2割であったことから[6]、女子EURO'2018は、2019年に女子世界選手権大会に向けて、チーム作りの途中であることが伺える。

攻撃時の突破を試みるポジションは、全体のLWは6.2％、LBは24.3％、CBは37.0％、RBは20.9％、RW6.8％、PVは4.8％であった。攻撃の中心であるLB・CB・RB（以下、BP）が約8割で、ボール保持をしながら攻撃を行っていた。BPは、個人技術のボールハンドリング（パス・キャッチ）から防御隊形の隙間からシュート、フェイントステップや走りで突破するカットインシュートを狙い、味方へのアシストパスなど攻撃中心のポジションであること。攻撃方法ごとの速攻では、約4割がLW・RW・PVによる、相手チームがボールを喪失した結果として、1人または、複数のプレーヤーの防御から攻撃への急激な移行にかかわる先行プレーヤーで、速攻は、相手防御隊形が整わないうちに攻めこむことで、短時間で得点をあげることができ、有効な攻撃手段[7]に関わるポジションとなる。

攻撃方法別1対1、2対2の攻撃割合は、全体での1対1の攻撃は43.5％、2対2の攻撃は54.8％であった。速攻時の1対1の攻撃は56.5％、2対2の攻撃は41.3％であった。遅攻時の1対1の攻撃は41.1％、2対2の攻撃は57.3％であった。攻撃活動は、ボールを保持している状況とボールを保持していない状況にわかれるが、ボールを保持（パスをキャッチング）し、個人技術を駆使し、単独で相手防御者を突破する1対1よりも味方のコンビネーションで相手防御を突破する2対2が、攻撃10回のうち2回多かった。村上らは[8]、3対3、2対2などの数人でコンビネーションプレーを行い、相手防御者を突破するシュートは、成功率も高く、攻撃側にとっては、シュートを成功させるためには有効な攻撃方法であると述べている。速攻活動は、相手防御隊形が整う前に素早いスタートから攻撃が始まることで、プレーの開始姿勢と最終姿勢に同一あるいは、きわめて類似したプレー実施となることで[5]、バランスを崩すこともなく、単純技術により行われることが伺える。

攻撃方法別1対1、2対2における突破時の成功率は、どの攻撃方法も5割弱で、速攻の1対1、遅攻の1対1、2対2は、2回に1回の成功で、速攻の2対2は3回に1回の成功であった。村上らは[8]、3対3、2対2などの数人でコンビネーションプレーを行い、相手防御者を突破するシュートは、成功率も高く、攻撃側にとっては、シュートを成功させるためには有効な攻撃方法と報告している。しかし、1試合あたりの攻撃評価における得点数を比較するとリオデジャネイロオリンピックで銅メダルを獲得したノルウェーとは約5点の差があった[6]。これは、2019'女子世界選手権大会（熊本）、2020'東京オリンピックに照準を

おいたチーム作りが考えられ、攻撃成功率が低いのではないかと思われる。

攻撃局面ごとのドリブル・パスの割合は、単独で相手防御者を突破する1対1の攻撃局面は、突破する技術として、パスからのランニングプレーや連続ドリブルでの突破方法が考えられる。競技規則のボールの扱い方では、ボールを持って最高3歩まで動くことが許される。ボールを空中で保持し、両足または片足が床に着地し、その後どちらかの足が床に着地したところから3歩動くことが可能になる。ドリブルは、ボールを一度はずませ、再び片手または両手でつかむこと。また、片手でボールを繰り返し床にはずませ、その後に片手また両手でつかむまで許されることで[9]、パスを捕球してから3歩移動し、ドリブルはボールをつかまない限り、無制限に行うことができる。このことで、コート内に空間がある1対1は、味方プレーヤーがみえない場合に連続ドリブルの使用が適当で、パスからのドリブルで突破を試みる個人技術が伺える。一方、2対2は攻撃者と防御者が同数であり、防御者2人の間を攻撃し、どちらかの防御者をひきつける。また、2人の防御者の間隔を広げて味方に正確にパスできるかがポイントとあり[5]、攻撃者1人を余らすアウトナンバーを作ることが問題となる。これは、防御者の左右の空間をフェイントステップやドリブルを駆使し、パスを使い分けて突破を試みているのではないかと思われる。

攻撃方法別ドリブル・パスの割合では、全体のドリブルが約5割、パスも約5割で半々だった。杉森は[10]、ボール保持状態の運動の組み合わせで、攻撃のきっかけ局面は、キャッチ→ドリブル→シュート→パスが多く、キャッチ→ドリブル→フェイント→シュート、キャッチ→フェイント→ドリブル→シュートの順であったと述べ、世界のトップレベルの選手は、ボールを保持し、常に状況判断を行い、正確度の高い技術と空間認識、突破可能な防御者との間合いで、常にシュートを狙い攻撃していることと思われる。また、速攻では約8割がドリブルを多用していることで、相手防御隊形が整わないうちに個人技術で攻めこむことが有効であることがわかった。

攻撃方法別ドリブルにおける突破時の成功率は、速攻時のドリブルは約10回に6回から7回成功し、フェイントからのドリブルも10回の内、4回から6回の成功だった。図8、9、10（資料）にボール保持時のドリブル、ステップを示したが、世界のトップレベルの選手は、どの局面に対しても、防御間を攻めるために、ドリブルやフェイントからのドリブル、ドリブルからのフェイントを駆使し、得点をあげるためにシュート完了を目指していることが示された。

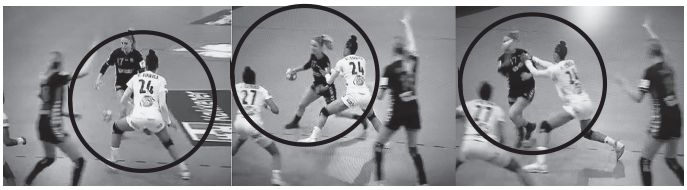

図8　（資料）
ドリブルステップでの突破

図9　（資料）
フェイントからのドリブルステップで突破

図10　（資料）
ドリブルからのフェイントステップで突破

また、速攻は、防御からサイドプレーヤーおよびポストプレーヤーの先行プレーヤーで攻撃活動が行われ、高度な戦術展開を要せず、比較的に容易にシュートへ至ると報告され[11]、パス回数が少なく、相手陣地に攻めこむことが可能となることで、ドリブルの個人技術を磨き、得点力をあげるトレーニングの必要性が伺えた。遅攻でのドリブル、フェイントドリブルも約4割から6割の成功率があったことで、キャッチ→ドリブル→シュート→パス、キャッチ→ドリブル→フェイント→シュート、キャッチ→フェイント→ドリブル→シュートのボール保持状態の個人技術を組み合わせた[10]トレーニングの必要性が伺えた。

攻撃局面ごとの突破時におけるドリブル後のボール保持足は、1対1の局面時のドリブル後のボール保持足は、右足が5回多く、フェイント後のドリブル保持足は、左足が2回多かった。2対2の局面時のドリブル後のボール保持足は、左足が2回多く、フェイントドリブル後のボール保持足は、左足が6回多かった。競技規則のボールの扱い方は、ボールを持って最高3歩まで動くことが許される。ボールを空中で保持し、両足または片足が床に着地し、その後どちらかの足が床に着地したところから3歩動くことが可能になる。ドリブルは、ボールを一度はずませ、再び片手または両手でつかむこと。また、片手でボールを繰り返し床にはずませ、その後に片手また両手でつかむまで許されること述べられている[9]。ジャンプシュートについては、真上に跳んで最高打点でシュートを放つばかりではなく、横やうしろに跳んだり、ジャンプのあと空中でためてからの落ち際や最高打点に到達する前にクイックで放つなど、ジャンプシュートにはさまざまなタイミングがあると示している[12]。このように高いジャンプを必要とすることで、基本ステップは、右利きは左足で踏み切り、左利きは右足で踏み切ることから、ルール上許される歩数は、右利きの場合、ドリブル後のボール保持足が左足の場合、左足→右足→左足、または、右足→左足となる。左利きは、右足→左足→右足、左足→右足となる。このことで、1対1の右利きは、相手防御者に対し、左右の空間を攻めるためにドリブルまたは、ドリブル後の着地足で半身ずれを作り、左足でジャンプしていること。左利きは、ドリブル後の右足でボール保持し、ルール上許される歩数を最大限に使い、空間を大きく移動していることが考えられる。

5. まとめ

本研究では、2018’女子EURO選手権大会Semifinal、Finalの試合から、世界トップレベルの試合全体像と個人技術のドリブルに着目し、攻撃方法別、攻撃局面からボールの扱い方の要因を検討した。結果として、以下のような所見を得た。

(1) 1回の攻撃は、ゆさぶりから突破まで約35秒前後かけて攻撃され、10回の攻撃で速攻が約1～2回、遅攻が8～9回であった。
(2) 攻撃方法の速攻、遅攻の1対1、2対2は攻撃2回に1回成功することで、得点力をアップさせるには、個人技術力とコンビネーションを磨く必要性がわかった。
(3) 世界のトップレベルの選手は、ボールを保持すると、シュートを狙うために、パス、ドリブルの状況判断を行い、正確度の高い個人技術と空間認識、突破可能な防御者との間合いで、常に得点を狙っている。
(4) ボール保持時における運動の組み合わせたトレーニングの必要性が示された。
(5) 突破時におけるドリブルは、防御者の横に行い、ボール保持足は、2歩または、3歩で空間を移動する。フェイント後のドリブルは1歩でシュートを狙うステップワークの重要性が伺えた。

引用・参考文献

1) 杉森弘幸･大西武三･水上一･河村レイ子 (1991)：ハンドボールのミスプレーに関する一考察. 筑波大学運動学研究第7巻：pp. 93－96.
2) ヤーンケルン.(1994)：スポーツ戦術入門. 大修館書店：東京. pp. 39－40.
3) 木野実・杉山茂監修. ヨアン・クンスト=ゲルマネク著. 中村一夫訳.（1981）：ハンドボールの技術と戦術. ベースボールマガジン社：東京. pp. 15－19.

4）　荒川清美監修.石井喜八･北川勇喜編著.（1980）:ボールゲーム指導辞典. 大修館書店：pp. 59－63.
5）　写真と図解によりハンドボール
6）　八尾泰寛（2018）：ハンドボール競技の個人技術に関する研究：ヨーロッパ選手とアジア選手の攻撃時のボール保持の仕方について. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第53号：pp. 183－188.
7）　川村レイ子・大西武三・水上一（1985）：ハンドボールの速攻に関する研究. 筑波大学体育研究7号：pp. 63－70.
8）　村上成治・土井秀和・長岡雅美・山崎秀幸・西田宏（1997）：ハンドボールにおけるGame観察. ―チームの攻撃力の評価に関する基礎的研究―. 大阪教育大学紀要第46巻第1号：pp. 103－109.
9）　ハンドボール競技規則（2019）：公益財団法人日本ハンドボール協会. 東京：pp. 22.
10）杉森弘幸（1998）：ハンドボールのゲーム観察に関する一考察（1）. 岐阜大学教育学部研究報告第22号：pp. 23－30.
11）八尾泰寛（2013）：ハンドボール競技のゲーム分析―速攻における局面に着目して―. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要第48号：pp. 81－85.
12）スポーツイベント･ハンドボール編集部編集編著.（2014）：目からウロコのシュート術,（株）グローバル教育出版：東京. pp. 12.